

茨城県天心記念美術館

常陸太田市立世矢小学校 三年 橋 はし 本 もと 和 かず 真 ま

「ぼく今日ここに来るの初めてだよ。」
と、ぼくが聞いたら、

「ちがうよ、和真はここに来るのは二度目だよ。」

「五才のころ、いわさきちひろの絵を見に来たことがあるんだけどわすれちゃったかな。」

と、お父さんやお母さんに言われました。そうかなと思いなから、広い美術館を歩いていくとなんとなく思い出してきました。

今回は、「ごんぎつねと黒井健の世界」の絵を見に行きました。ぼくは、この本と「手ぶくろを買いに」の本はもっているのを見たことはありません。ぼくは、真つ先に「ごんぎつね」の表紙の絵がかざつてあるコーナーに行きました。本物の絵は、とても上手で、ぼくもあんな絵をかきたいと思いました。美術館の中の絵の教室で、ぼくもこの絵のぬり方にちようせんしてみました。色えんぴつやコンテと言う道具を使ってかいているそうです。

この美術館になんでこんなに有名な人の絵が来るのか、とてもふしぎに思いました。でも次に岡倉天心記念室を見て、なんとなく分かってきました。むかし、岡倉天心と言う人が

この五浦の地を気に入って、とても絵の上手な人を集めて学校を作ったそうです。

じつさい天心がくらしただとや六角堂と言う所にも行ってみました。海がすぐ目の前に見えてがけの上にある、とてもきれいな場所でした。天心が気に入ったのもなんとなく分かるような気がしました。

ぼくは、五浦は、絵が好きな人なら一回は来たいと思うような場所なのかなと思いました。そんな場所が、ぼくの住んでいる茨城にあるなんてとてもうれしくなりました。そして、また五浦にすてきな絵を見に来たいと思いました。

茨城のみどころさがし

東海村立中丸小学校 六年 野 の 中 なか 貴 たか 文 ふみ

ぼくの住んでいる茨城県のみどころを紹介したいと思う。

まず茨城県は、約三百万人の人口と、六千九十八平方キロメートル、全国第二十四位の面積をもつ県である。どちらかといえば存在感がうすく、名所もあまり知られていない県だ。しかしそれはもったいない。茨城は、たくさんのお土産品、特産品をもつ、みどころの多い県なのだ。

まず一つ目は、茨城は都内も田舎も近いところだ。ぼくが住んでいるのは東海村だが、かなり自然が多く、季節ならではの景色をみたり、遊びをしたりできる。春はオタマジャクシをすくい、夏は昆虫採集をし、秋は栗を拾い、冬は星をみるというように、自然の中で遊ぶのはとても楽しい。田んぼ

の稲を観察するのもおもしろいものである。

それでも、常磐線に乗れば、一時間半くらいで東京にも行く便利なところだ。逆に一時間山の方に走れば、水も空気もきれいで、ホタルもいる里山がある。

二つ目は、茨城は農業や漁業、工業がさかんで、特産品もたくさんあることだ。茨城では、西日本の作物と北日本の作物が、どちらでも作れる。それに茨城の近くには、海流がぶつかる潮目があり、プランクトンが増えて魚が集まってくる。ハマグリ、メロン、栗、サツマイモなどの食べ物がおいしい季節に食べられるのだ。工業では、県南や日立市には進んだ技術があるし、原子力発電所が日本ではじめてできたのも茨城だ。

三つ目は、ローカル線である。ひたちなか市内、十数キロメートルを走る湊線は特にすごい。単線で、すれちがうところがとちゅう的那珂湊駅だけなので、三十分一本しか走らないし、電化もされていない。でも、まわりに広がる田園風景は、とてもきれいなのだ。ディーゼル車特有の音や、警報器のない踏切、駅長もない無人駅、八十年以上そこにある駅などは珍しいし、それを変えずに保存しているのもすごい。それに、市内を移動するとき便利なので、観光だけではなく、移動手段としても使われているのだ。

最後に紹介するのは、茨城県民の歌のことである。歌の内容は、聴くたびに茨城県の特長をよくあらわしていて茨城らしいと思う。今はほとんど歌わないので、知らない人も多いが、昔は学校でよく歌っていたそうだ。隠れた茨城のすごいところである。

このように茨城には、あまり知られていないみどころがた

くさんあるのだ。そういう事を考えて、新しいみどころを探しながら茨城を歩くと、とても楽しい。

お盆と赤とんぼ

茨城大学教育学部附属中学校 二年 宇留野うるの 雅まさ 仁ひと

八月十三日には家族全員で祖父の墓参りをする。ワラや野菜で動物を作り、お墓にお供えしてくる。野菜のキュウリやナスなどで馬や牛を作る。それは先祖がこれに乗ってやって来るといふ信仰に基づいている。四本のマツチ棒や折った割り箸などを足に見立てて、差し込み馬、牛とする。キュウリは足の速い馬に見立てられ、あの世から早く家に戻って来るように。また、ナスは歩みの遅い牛に見立てられ、この世からあの世に帰るのが少しでも遅くなるようにとの願いが込められているそうだ。

祖母の実家の美浦村では十二日の夕刻、野火を炊いて迎え火とし、十六日に送り火を炊いて先祖の霊を送ったそうだ。迎え火の材料には、ワラや麻ガラが使われ、それをお墓や四辻、川端、門口などで燃やしたそうだが、今はあまりやらなくなっているそうだ。

盆花というのには、精霊にあげる花の事で、キキョウ、ハギ、ヤマユリ、オミナエシ、ホオズキなどがある。祖母の子供の頃はこれらの花を野山や庭などから摘んできたのだが、今は近所でも見つからないので、花屋さんで買って準備する。

盆棚は、竹やマコモが材料としては多く使われ、棚には位

牌を置き、季節の野菜、盆花などで飾る。供え物は、団子、そうめん、果物だが、毎朝必ず水を供え灯りを灯すのが習わしである。

お盆にはまた美しい盆提灯や盆灯籠を吊すのが風習だ。

十七日の朝にはマコモで作った船に、お盆中に供えた供物を載せて、霞ヶ浦に流したそうだ。これは、子供だった頃の父の役割だった。父は霞ヶ浦に流れていくマコモの船を見ながら、（ああ、今年も夏が終わったな）と思っただそうだ。しかし今は霞ヶ浦を汚さないという理由から、お盆の供物を流さなくなった。

お盆も終わる頃になると、ツイツイと群れを成して飛んでいるのが赤とんぼだ。

童謡『赤とんぼ』。小学生の頃歌ったこの歌は、なぜか今でもとても好きな歌だ。赤とんぼを見ると、この歌のことを思い出す。

そして僕は赤とんぼは霞ヶ浦の風景の中で見るのが、一番似合っていると思っっている。なぜなら、霞ヶ浦にはその昔日本海軍の航空隊があったからだ。そして予科練というパイロットの養成学校があり、祖父もそこで学んで零戦のパイロットとなったからだ。その日本海軍に、九三式水上中間練習機という訓練用の飛行機があり、それを俗に、赤とんぼと呼んでいた。実にゆっくりと飛ぶ所から、こう呼ばれたそうだ。

だから霞ヶ浦に赤とんぼはよく似合うと思っっている。

「赤とんぼには死んだ人の靈魂が宿っっているのだから、決してつかまえたり、殺生してはいけない」と教えてくれたのは祖母だ。

だから赤とんぼを見るたびに、どのあたりに靈魂は座っっているのだろうかあと、とても神秘的な気持ちになる。

夕焼けに全身とけこむように赤く染まり、細かく羽を震わせて飛んでいく赤とんぼ。

その姿に僕は見る事の無かった零戦を操縦している祖父の姿を想像する。

あの赤とんぼのどれかに、祖父の魂も乗っっているのかもしれない。

私の地域の「八朔まつり」

県立水戸第三高等学校 一年 菊本朝子

私の住んでいるひたちなか市那珂湊地区には、三百年ほど前から続いている「那珂湊八朔まつり」（天満宮の御祭礼）があります。以前は毎年の行事になっていましたが、近年は年番と呼ばれる担当町内によつては祭りの開催が難しく、ここ三年間は、祭りが出来ず、今年四年ぶりに八月二日、三日に行われることになりました。

私は那珂湊八朔まつりが何のための祭りなのか分からなかったのです、その由来などについて調べてみました。

由来は、天満宮を出御した神輿が浜下りする祭り、天満宮の祭神が海より現れたという伝承に基づくものでした。江戸時代に那珂湊は商業港として栄えていたので、それにつれ、豪華な祭礼へと発展しました。御祭礼は明治時代から「八朔祭り」とも呼ばれるようになったそうです。八朔とは旧

暦の八月朔日（一日）のことで、農作業を終え、豊作を祈り、人々の結束を強めるために贈答する習慣があり、地域の豊作、豊漁の祭事とした時期がこの頃ということから「八朔祭り」が行われるようになったのです。湊には、たくさんの田んぼや畑があり、農家も多く、魚市場もあります。だから、那珂湊地区でも行うようになったのかなと思います。

祭りの内容ですが、朝早くから行われ、山車は全部の町内を二日で回りきり、各町内にある事務所を回ります。私は家の近くにその事務所があるので、たいてい見に行きます。祭りの見所は、三日の朝に行われる「お浜入り」と二日、三日の夜だと思います。

「お浜入り」とは、勇ましい掛け声に合わせて、神輿を海に入れてもみ合うことです。民家の前を通り、海へ行くので、朝早いのですが、その勇壮さにふれたくて、見に行くこともありました。また、海に行くまで沿道の人が、神輿に水をかけるので、かっいでいる人はいくら夏といえ、寒そうでした。神輿を海の中へ沈めて、その中でもみ合うので、見応え十分です。

二日、三日の夜は、出発する場所は違いますが、中心街（商店街）を歩行者天国として、露店が立ち並び、その中を各町内の山車が練り歩きます。

今年の祭りの二日の夜は、私は山車を引かず、浴衣を着て、友達と見ていました。でも山車を見ていたら、なぜかとても山車を引きたくなり、うずうずしてしまいました。だから、三日の夜は町内の山車を引くことにしました。夕方、商店街の近くから山車が発するので、母と母のいとこ、私の友達で行きました。商店街の前を年番、六丁目の獅子（ささら）、

元町の弥勒が通り、各町内行列が始まりました。その後に、風流物の町渡しが行われるので、行列が終わってから、母の友達と合流して、私の町内の山車を引き始めました。この町内の山車は、約八十年ぶりに新調されました。山車どうしが擦れ違う時など、組頭の合図と共に山車が引いていた若者が山車に近い順になだれ込み、背中で「オッシャイ」が始まります。「オッシャイ」とは、押し合いの意味だそうです。この「オッシャイ」も、見応えがあると思います。町内に戻ってから、一旦、山車が止まります。この時、小さい子や小学生などが帰ることになります。

「ありがとうございます。来年もまたよろしくお願いします！」と、ここまで引いた子供達一人一人に声を掛け、握手をしている町内の大人の方がいました。その姿を見て、とても感動しました。私は、せっかくなので、最後まで山車を引きました。坂の上に山車を入れる場所があるので、走らないといけません。急な坂なのでとても大変ですが、走りきって、付いた時の気分は最高でした。

私は、那珂湊八朔まつりは、那珂湊だからこそ出来る祭りだと思っています。なぜなら、那珂湊という町の雰囲気は随所に表れているからです。他にも祭りがありますが、こんなに地域の人が大人から子供まで、力を合わせ、一つになって行い、やって良かったと思ひ、お囃子の音が耳に残り、人の温かさを感じられる祭りは無いと思います。そして、三百年以上も続いているこの那珂湊八朔まつりはこれからもずっと続けていくべきだと思います。私達のような若い世代の責任はとても重いものだなと感じています。